

コメント

市川 裕

シェーファー教授にコメントできることを大変光栄に思う。最初に彼の名前を知ったのは、『ショーレムのユダヤ教神秘主義から50年を経て』という本を注文したときである。彼はラヘル・エリオール教授と共編者であった。当時、私は、彼はユダヤ神秘主義の学者かと思った。やがて15年ほど前に、エリオール先生と知己を得て、東京大学に客員教授として招待した際に、彼女は彼のことを大変熱く語った。それ以来、彼に会えることを楽しみにしてきた。それで、この会議で彼に会えることを非常にうれしく思う。私の友人が、キリスト教に対するユダヤ教の見解についての彼の著作の日本語訳を送ってくれたとき、期待はさらに高まった。そして、時宜がかなってこの会議が開催され、彼が招待され、このテーマで話されることになった。同志社大学 CISMOR の企画メンバーに心よりの感謝を申し上げたい。既に、彼の著書については今日の発表で概観されたので、私はこの著書に表れている彼の考えの興味深いいくつかの点をコメントとして述べたい。ユダヤ教徒とキリスト教徒の現代の感情の問題については立ち入ることはできない。

私の主たる関心は以下の4点である。

1. ユダヤの賢者たちのキリスト教に対する辛辣な批判の理由

シェーファー教授は、バビロニアのタルムードのラビたちが4つの福音書の中身、特に、ヨハネによる福音書の中身を熟知しており、イエスがメシアであり、神の息子であるというキリスト教の考えに、意図的に、注意深く、自信満々に、新約聖書物語をもじり、揶揄した反論を展開したことを呈された。ユダヤ教の見地からは一見理解不能な非合理的な記述をいかに、賢者たちが熱烈に反論しているかを描写された。イエスのことを、ユダヤ教徒の母親がローマ兵士と密通して生まれたマムゼルとして激しく貶める。では、なぜ彼らはキリスト教徒をそんなにも自由に批判できたのだろうか。シェーファー教授は、支配者であるササン朝ペルシアがキリスト教ローマと敵対しているというペルシア時代のバビロニアの特殊な歴史環境下で、ユダヤ教徒はキリスト教神学に対する彼らの考えを自由に表現することによって、比較的自由と安全を謳歌していたと想

定する。

キリスト教の基本的神学教義を賢者たちがあけっぴろげに非難しているということから、キリスト教の神学は伝統的ユダヤ教思想の中で、何も理解されていなかったということが確かに理解される。だから、キリスト教の教義に対するこのようなユダヤ教の論争は、自己満足の行為で、彼らはキリスト教よりもユダヤ教が優位であることを誇っていたと理解できる。しかしながら、処女の母親からの清らかなる誕生や神性の受肉といったキリスト教の教義が、普通の常識で全く理解されていなかったのなら、キリスト教徒もユダヤ教側からのこのような辛辣な批判に対して反論もできたのではないだろうか。ということは、異邦人のキリスト教徒にとっては、キリスト教がユダヤ教を魅了するか否かということに関心がなかったのではないかと想定される。むしろ彼らに関心があったのは、異邦人世界の説得である。もしそうであるならば、ユダヤ教からの批判は、自己満足と独善以上のものではなかったのではないだろうか。

よって、我々はなぜ賢者たちがそのように辛辣な批判をしたのかということを理解しなくてはならない。古代ユダヤ教社会には賢者とその先駆者の間に競合者がいたことが知られている。ファリサイ派がそうであり、他方、サドカイ派、おそらく祭司階級でバル・コホバをメシアとする運動の支持者が、そうであった。そして互いに、それぞれのグループの正当性を強く主張しながら激しい論争を繰り広げていた。その中で、賢者たちが最終的に彼らの正当性を主張し勝利したことが分かっている。紀元後70年の第二神殿崩壊以降のユダヤ史には、様々な論争が加わった。賢者はカバリスト、シャブタイ派、ハシディズム、近代主義、世俗主義、シオニズム、などなどである。キリスト教は、このような主たる敵対者の一つだったと言えるのだろうか。そして、彼らの論争の方法は、いくつかの点で似ていたのだろうか？ もし、キリスト教徒との論争において、過度の辛辣さが典型的な特徴であるとするなら、それはキリスト教がユダヤ教の環境の中でやはり力のある敵対者で、異邦人の中に多くの信奉者を集め、賢者たちもその存在を無視できなかったのだろうか。

2. ユダヤ教徒とキリスト教間の対話における善意の可能性

この最初の点は、次の点につながっている。討論（マサ・ウ・マタン）と論争（マフロケット）は、ユダヤ教徒の賢者の中でも認められており、天の意志によれば、ハラハー原理を確立する上で、推奨されているほどである。他方、ある種の論争は嫌悪されている。その典型例がモーセとアロンに反対するコラとその徒党の論争である。ミシュナ・アボートのテキストに次のようにある。

アポト 5・17

天のためであるならば、どんな論争も最後には解決する。しかし、天のための論争でないものは、最後はどんな結論ももたらさない。天のための議論とは何か。それはヒレルとシャンマイの間のような議論である。では、天のためではない論争とはどのようなものか？それはコラと彼の徒党らの論争である。

もし、天のための議論がユダヤ教の賢者とキリスト教徒の指導者の間で、タルムード時代にあったとしたら、ユダヤ教側がどのように反応すれば、有意義な、自己満足以上のものとなり、両者にとって天のための議論となったのであろうか？福音書に記述されているナザレのイエスの活動は、討論と議論が天のために行われている状況を反映していると思われる。この点において、有名なタルムードのアガダーによればローマの当局に逮捕されたラビ・エリエゼル・ベン・ヒルカノスの、イエスの教えに対する態度は、このような善意の対話のまれな例を反映しているのかもしれない。彼はなぜ自分が逮捕されたのか正確には分からなかったが、彼の弟子であるラビ・アキバによってヤコブという名前のキリスト教徒の何がしかの考えを認めてしまっていた、あるいは同意してしまっていたという事実を思い出す。それで彼は逮捕されたのである。これも私は両者の間の善意の対話の例として理解したい。

3. ラビ・エリエゼル・ベン・ヒルカノスとはどのような人物か？

この点に関しては、シェーファー教授は写本に基づいて、反対見解を提示され、エリエゼルが逮捕されるに至った二つの理由を挙げている。一つには、性的乱痴気騒ぎであり、もう一つは、魔術的な力である。私にはむしろラビ・エリエゼルは、好きなように超自然的な力に訴えて奇蹟を起こす人間というより、もっと合理的な人間であり、魔術を行使する人というより徳の人だと思われる。しかしながら、写本に基づく彼のイメージは、明らかに彼の前者のイメージを表している。しかし、このような像は、ラビ・エリエゼルの他の伝承と両立するのだろうか。どのような文書や証拠がシェーファー教授の結論を指示するのだろうか。そしてキリスト教徒もローマ当局によって、魔術的な力の濫用を特に非難されていたのではないだろうか。どのような魔術を彼らは行使したのだろうか。こうした質問をしながら、私の関心は、この賢者の人間性の歴史的側面の方に寄せられるが、氏は、これらは賢者たちが異端者全員に向けたイメージであり、歴史的眞実とは何ら関係がないと言われるかも知れない。

4. 異端あるいはミーニームについて

賢者が、誰を異端者、あるいはミーニームと見なしていたかについて、これまでの研究者の見解と比較して新しい理解を示されたのだろうか？シェーファー教授はすでにダニエル・ボヤーリンの説のコメントの中で、この質問について答えられている。